

言語を社会知と看做すとはどういうことか: 新たな理論的枠組み構築のための整理

吉川 正人 (慶應義塾大学大学院/日本学術振興会特別研究員)

1. はじめに

チョムスキー革命以来、言語学は認知科学の一員となり、言語の理論的研究はヒトの認知の一機構の研究となった。このことは、「言語学の個人化」を意味するとも言えよう。一方で、社会言語学や文化/言語人類学など、言語を社会・文化的対象として捉え分析する言語研究も同時に存在してきたのも事実である。

このような「ギャップ」は、前者、即ち(認知-個人主義)的研究は言語活動における「基礎」の研究であり、後者、即ち(社会/文化主義)的研究はその「実践」たる「応用」の研究であるという一種の「住み分け」によって埋められていたように思える(Cf. Isac & Reiss, 2008)。

言語に関してヒトの個体がそれ自身「完結」した、即ち、「個の中に閉じた」システムを有しているのであれば、社会的実践はそれぞれ独立した個の相互作用として、つまり「個の発展形」として捉えられ、上に述べた「住み分け」が成立するとも言えよう。しかしながら、言語に関しては個は「不完結」であり、常に他者とのかかわりの中、もしくは社会システムの一部としてしか意味を成さないようなシステムを有しているとすれば、事態はずっと複雑な様相を呈することとなる(Cf. 三宅・宮川・田村, 2001)。

Beckner et al. (2009: 3) や Enfield (2008: 242-243) が正しく指摘するように、ヒト個体の持つ知覚・認知システムそれ自体は、別段言語を「必要」とはしない。言語の必要性は、社会性・公共性の達成に起因する。¹⁾ 従って、ヒトの言語行動および言語記憶は社会的な「評価」や諸情報が深く影響しているということは十分に考えられる。ここに、ヒトの個体同士の相互作用とネットワークによって形作られる「社会」とそこに宿った創発的な特性が、逆にそれを構成する成員たる個体の行動に影響

を与える、という図式が浮かび上がる。

このような可能性は、例えば Beckner et al. (2009) によって提案された「複雑適応系としての言語」観で体現されていると言える。そこでは、言語は話者というエージェントが複雑な社会ネットワークによって結びつけられたシステム(による営み)であると看做される。

本稿では、以上のような観点から、言語をコミュニティの有する「社会知」と看做し、その「社会知としての言語」観の下、新たな言語理論、特に文法理論を構築することをめざすために、必要な論点の整理を行い、その一つの完成形である「社会統語論(Sociosyntax)」の可能性を考える。

2. 社会知とは何か

まず社会知を以下のようなものと定義する:

- (1) a. 個人ではなく社会(e.g., 言語コミュニティ)全体に所有される知識であり、
- b. 少なくともその社会の成員であれば等しく利用可能であり、
- c. 条件が整えば(e.g., 当該のコミュニティとの接触)他の社会の成員にも継承可能な知識である。

(1a)で言う「社会」とは話者とそのネットワークから構成される複雑適応系のことである。これは、ヒトの脳が、情報を持っているのは個々のニューロンであるにもかかわらず、実際はネットワーク全体で知識を構成しているのと同じである。

社会知は勿論個人にとって利用可能であるが、個人の独占物ではない。言い換えれば、社会知としての言語は、同じ社会に属する「他者」なしでは意味を成さない。そして同時に、社会知は個人知の集合を以て初めて出現し得るものであり、「個人知無き社会知」はあり得ない。

3. 個人における社会知の利用可能性

しかしここで大きな問題に直面する。個の相互作用によってネットワーク構造が知識や情報を有するというモデルはヒトの脳におけるニューロンのネットワークにも見てとれるが、脳の場合個々のニューロンが個別にネットワーク全体で表現されているような情報を操作・利用するということはない。一方、言語をヒトのネットワーク＝複雑適応系の持つ社会知であると看做した場合、ヒトの個体も同時にその知識を利用可能である。この点で、脳のアナロジーは部分的にしか妥当でなく、そしてその

¹⁾ “Language is shaped by human cognitive abilities such as categorization, sequential processing, and planning. However, it is more than their simple product. Such cognitive abilities do not require language; if we had only those abilities, we would not need to talk. Language is used for human social interaction, and so its origins and capacities are dependent on its role in our social life[...].” (Beckner et al., 2009: 3)
“An innate intellectual interest in perceptually salient distinctions in nature is insufficient to affect language. [...] To enter into linguistic structure, this intellectual interest has to be made public, it has to be a shared focus of social interaction. An individual who forms conceptual categories based on perception and innate curiosity need not label them with words.” (Enfield, 2008: 242-243)

妥当でない部分が「社会知としての言語」モデルの問題点となる。

この、「いかにして個は全体の情報を知りうるのか」という問題を解決しない限り、「社会知としての言語」モデルの成立は困難である。従って、以下でこの問題に対する回答としての可能な解決案を探る。

3.1 個人知の不完全性

まず大前提となるのが以下の事柄である：

- (2) どの個人も、社会知としての言語の全体像を知らない。

あくまでも個人が行えるのは社会知の(部分的)「利用」であり、知識構造全体は単なる「推察」によって個々人が独自に「構築」しているものであると考えられる。これは、規範意識やステレオタイプが(接触/使用頻度のような直接経験に劣らず)言語パフォーマンスに大きな影響を及ぼす(Cf. Johnson, 2006)ことをうまく説明する。²⁾

次に解決せねばならない問題は、

- (3) a. 我々はなぜそのような推察を行うのか?
b. そのような推察はなぜ可能なのか?

ということである。

自らの掌握しうる範囲の知識、つまり、個人知のみを利用していけば、推察という「努力」の必要な社会知を利用するよりもはるかに少ない労力で活動が可能であるはずである。にも関わらず、敢えて社会知を利用しているというからには、それ相応の理由、もしくは「動機(motivation)」が必要である(3a)。

そして勿論、いかにしてそのような推察が可能となるのか、ということも問題となる(3b)。以下でそれぞれについて可能な回答を提示する。

3.2 「社会的圧力」による駆動

(3a)の回答としては、「社会的圧力(social pressure)」の存在が考えられる。言語の公共性・社会性を鑑みると、独りよがりな独特な語りは様々な意味での「伝達ミス」を引き起こす可能性が非常に高い。これは単に「情報の伝達」を表しているわけではなく、態度や感情、意図などの伝達も含む。

そもそも、その理由はなんであれ、ヒトが言語的・非言語的に「伝達」もしくは「コミュニケーション」を行うことを必要とする生き物だとすると、他者の「こころ」の本質的理解不可能性という超え難い壁に直面する訳で、これを(疑似的に)回避し曲がりなりにも伝達を可能にしているのは、明らかに共有された慣習の体系が存在するからである(黒田・寺崎, 2010)。

²⁾これが正しくないならば、「正しい日本語」の審判に、『広辞苑』のような既存の(権威ある)辞書の定義や国語学者などの「専門家」の解説が持ち出されることが全く説明できなくなるように思われる。辞書や専門家の知識は、社会知の「顕在化」の結果であり、個人のレベルでは推して知ることもできなかつた情報を「突き止めた」結果であると言える。

さらに重要なことは、慣習が本質的に恣意的である以上、ある慣習Cの存在及び性質を知る術は、Cの「使用の実態」を観察によって学習するしかないということである。³⁾

従って、ヒトが言語的伝達に対して取るべき最も賢明な方略は、「なるべく誰かの使った方法を真似る」、即ち、「なるべく他者と同じように話す」ことである(Keller, 1994)。この、「模倣へと向かわせる力」こそが、社会的圧力である(吉川, 2010)。これは権威追従のような意識的なものではなく、無意識的な作用であるが、意識的に回避することも可能である。⁴⁾ またこれは、ヒトに生得的な「同化の本能」のようなものである可能性もある(Trudgill 2004: 28, 2008: 252)。

3.3 社会性認知による推察

(3b)の回答は、他者に自己投影し、意図を読む能力(e.g., Tomasello & Rakoczy, 2003)等の社会性の認知を可能にする種々のメカニズムに求められよう(開・長谷川, 2009)。これは「慣習の学習」の場面において必要な過程である。言語的慣習が「記号」的性質を持っている以上、使用される「形式」と対になる「情報」の側面を「知る」ことが必要となる。これを可能にしているのが、社会性認知のメカニズムであると言える。

また、学習した慣習の「使用」の場面においては、エピソード記憶の関連も指摘できる。状況に応じた適切な言語使用を可能にするためには、学習した無数の慣習の中から適切な慣習を選び出す必要が生じる。頻度などに還元できない社会的な要因を適切に拾い出すには、「一度限り」の情報を効果的に利用する必要が生じる。これを可能にするのが「エピソード想起(episodic recollection)」である(Klein et al., 2009)。

4. 社会統語論の可能性

以上、「言語を社会知と看做す」ということがどういうことであるか、その可能性と含意を述べて来た。ここで、そのような言語観が可能な言語モデルとして成立するとして、それが言語の理論にとってどう重要であるか、言語現象の説明に対して何が言えるか、ということを考える必要がある。以下では、「社会知としての言語」観の一つの体現として、「社会統語論(Sociosyntax)」の可能性を考える。

4.1 個人知の「社会的制御」による計算機構

言語が社会知であり、コミュニティに共有された慣習の体系であるならば、言語話者は社会に共有された「(社会/文化)資源」としての有効な表現の目録を適切に利用することで言語活動を行っているということになる。と

³⁾勿論、慣習は体系をなしており、個別に独立に存在しているわけではないので、個々の慣習を網羅的に個別に学習する必要はない。

⁴⁾この意識的な側面を扱ったものが、所謂「適応理論(Accommodation Theory: e.g., Giles, Coupland, & Coupland, 1991)」であろう。

すれば必要となるのは、

(4) a. 「表現の目録」の発見

b. 「表現の目録」の利用法の習得

ということになる。一般に流布している文法理論の用語で言えば、(4a)が「辞書/レキシコン」の獲得、(4b)が統語論の獲得、ということになる。冒頭に述べた〈認知-個人主義〉の文法理論では、両者は共に個の中に閉じた認知的な営みであり、従って文法は個の中に閉じたシステム＝認知システムであると看做される。

社会統語論もこの点には同意する。恐らくそのようなシステムが存在していることは事実である。しかしながら、社会統語論は同時に、純粋に認知的なシステムは、自然言語の文法の振る舞いを正しく予測しないと考える。このような態度は、通常例えば言語能力と言語運用の区別のような理想化によって退けられる「言い間違い」等の「運用エラー」の問題、「誤用」と「正用」の区別の問題(黒田・寺崎, 2010)、個人差の問題といった、自然言語に見られる「ノイズ」を言語の重要な性質として積極的に取り込もうと考えることに起因する。恐らく個の中に閉じた認知システムとしての「文法」は、エラーを頻繁に起こし、正用と誤用を区別できず、個人差の非常に大きいシステムになるのではなかろうか。

今列挙したような問題は、個の中にある計算機構によってノイズとして取り除かれるようなものではなく、ステレオタイプや権威のような社会的な要因によってのみ判断可能なものであると考える。これは個のレベルでは、上に3節で述べたように、「推察」によって成し遂げられる。この推察が非常に頑健なものであれば個人のレベルでも計算は安定し、結果として集団のレベルでも安定した「答え」が導き出され、非常に均一な言語活動が生まれることとなるであろうが、容認性判断における個人差などの実態を鑑みると、これはどうもありそうもない。

以上から、社会統語論では、以下のような、非標準的かつ極端な想定を行う：

(5) 文法性の判定は、個のレベルでは達成し得ない。

言い換えれば、文法は個人の中には存在しない、ということである。ただし先述の通り、社会統語論は個のレベルでの計算機構が文法にとって重要であることは否定しない。単にそれは不十分であり、言ってみれば、「社会的な制御」が不可欠であると考え(吉川, 2010)。最後に以下で、この「社会的な制御」の原動力として働き得る要因として、入力頻度の問題を取り上げる。

4.2 入力頻度の再解釈

経験主義的な統語理論、例えば「用法基盤 (usage-based)」の統語獲得理論 (e.g., Tomasello, 2003) では、任意の統語構造 c の獲得には、それを具現化する事例 I_c の入力頻度が重要であることが主張される。この主張は信じるに値する十分な証拠があるし、直感的にも納得のいくもの

であるが、一方で、入力頻度 (の多さ) は、統語獲得の十分条件にはなるが必要条件にはならない可能性がある。例えば Arnon & Snider (2010) は、実験結果から「一度でも見聞きした表現は全て記憶されている」という言語記憶説を主張している。同種の主張は Port (2007, 2010) などにも見られる。さらに Arnon & Snider (2010) は、頻度主義的な説明、即ち、「一定以上の入力頻度があったものは記憶される」という言語記憶観では、どんな表現も初めて聞いた段階ではそれが以後どれくらいの頻度で出現するか、どれくらい重要なか予測することができない、つまり、予めしておくべき対象が分かっていない以上、パラドックスに陥ってしまうという指摘を行っている。

従って、頻度による強化学習は、必要でないばかりか、学習モデルとして内在的な欠陥を有していることになる。

ここに大きな疑問が生じる：

(6) 言語表現の学習が頻度による強化学習でないならば、一体いかなる理由で言語の学習にとって頻度が重要となり得るのか？

可能な回答の一つは、「頻度は重要ではない」というものである。しかしこれは、種々の経験則や研究結果と矛盾するため、あまり好ましい回答ではない。本稿ではここで、この問題に対する回答として、以下のような可能性を提示する：

(7) 言語学習にとって頻度が重要なのは、ある表現 e もしくはそれが具現化する構造/パターン c の入力頻度 $f(e)$ or $f(c)$ の高さが e or c の「他者使用の実績」となるからである。

言語は単に情報として与えられるものではなく、自らも能動的に「使用」するものである訳で、その意味で言語の学習にとって重要なのは「どれだけ使用可能か」という、「使用可能性 (usability/utility)」であると言える。この点で、先に挙げた社会的圧力の議論から、他者使用の実績が重要であるという帰結が得られる。

しかし頻度は必要条件ではなく、たとえ低頻度であっても権力者や所謂「人気者」の使用した表現であれば、十分な「社会的影響力」を持つ(と見え得る)ため、好んで再利用されるということは十分にあり得る。そしてこれは実際に起こっていることであろう。

従って、入力頻度を (7) のように捉えることは、頻度と必ずしも相関しないが、それでいて言語使用に大きな影響を与えるような要因を、入力頻度と同一線状で扱えるという利点を持つと言える。

5. 結語

本稿では、言語を話者をエージェントとする複雑適応系としてのコミュニティが有する「社会知」であると看做す新たな言語観を提唱し、その基礎づけを行った上で、

「社会統語論 (Sociosyntax)」の可能性を論じた。

社会統語論は現時点では研究プログラムか、もしくは「哲学」的な側面が強く、実証のレベルにはほど遠いが、まずはこのような理論的な検討が必要であることは間違いない。理論的なレベルでの問題としては、「社会的」であるとはどういうことであるかの検討が不十分であることが挙げられる。今後は社会性認知研究の知見等を取り入れこの理論的な不備を補填すると共に、実証の可能性も探っていくことが必要となろう。

謝辞 本稿の議論は、2010年3月9日に東京大学本郷キャンパスにて行われた、言語処理学会第16回年次大会(NLP2010)におけるテーマセッション、「言語表現」と「言語」のあいだで筆者が発表した「社会的圧力が形作る文法」(吉川, 2010)という口頭発表の内容、及びセッション中の議論に基づく。従って、そのような素晴らしいセッションを企画・運営して下さった座長の影浦峽氏(東京大学)、興味深い議論を展開された発表者の黒田航氏(情報通信研究機構)を始めとして、発表者の小橋洋平氏(東京工業大学大学院)、丸山岳彦氏(国立国語研究所)、那須川哲哉氏(日本IBM)、さらには、全体討論においてフロアから議論に加わって下さった複数の参加者の方、特に玉城伸仁氏(京都大学大学院)に、この場を借りて謝意を表したい。

参考文献

- Arnon, I., & Snider, N. (2010). More than words: Frequency effects for multi-word phrases. *Journal of Memory and Language*, 62(1), 67 - 82.
- Beckner, C., Ellis, N., Blythe, R., Holland, J., Bybee, J., Ke, J., Christiansen, M., Larsen-Freeman, D., Croft, W., & Schoenemann, T. (2009). Language is a complex adaptive system: Position paper. *Language Learning*, 59(supplement 1), 1-26.
- Enfield, N. (2008). Linguistic categories and their utilities: The case of Lao landscape terms. *Language Sciences*, 30(2-3), 227-255.
- Giles, H., Coupland, J., & Coupland, N. (1991). *Contexts of accommodation: Developments in applied sociolinguistics*. Cambridge: Cambridge Univ Press.
- 開一夫・長谷川寿一(編). (2009). ソーシャルブレインズ: 自己と他者を認知する脳. 東京: 東京大学出版.
- Isac, D., & Reiss, C. (2008). *I-language: An introduction to linguistics as cognitive science*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Johnson, K. (2006). Resonance in an exemplar-based lexicon: The emergence of social identity and phonology. *Journal of Phonetics*, 34(4), 485-499.
- Keller, R. (1994). *On language change: The invisible hand in language* (B. Nerlich, Trans.). London; New York: Routledge.
- Klein, S., Cosmides, L., Gangi, C., Jackson, B., Tooby, J., & Costabile, K. (2009). Evolution and episodic memory: An analysis and demonstration of a social function of episodic recollection. *Social Cognition*, 27(2), 283-319.
- 黒田航・寺崎知之. (2010). 言語の「自然態」を捉える言語理論の必要性. 言語処理学会 第16回年次大会発表論文集 (pp. 146-149).
- 三宅美博・宮川透・田村寧健. (2001). 共創出コミュニケーションとしての人間-機械系. 計測自動制御学会論文集, 37(11), 1087-1096.
- Port, R. (2007). How are words stored in memory?: Beyond phones and phonemes. *New Ideas in Psychology*, 25(2), 143-170.
- Port, R. (2010). Rich memory and distributed phonology. *Language Sciences*, 5, 43-55.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.
- Tomasello, M., & Rakoczy, H. (2003). What makes human cognition unique?: From individual to shared to collective intentionality. *Mind and Language*, 18(2), 121-147.
- Trudgill, P. (2004). *New-dialect formation: The inevitability of colonial englishes*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Trudgill, P. (2008). Colonial dialect contact in the history of European languages: On the irrelevance of identity to new-dialect formation. *Language in Society*, 37(2), 241-254.
- 吉川正人. (2010). 社会的圧力が形作る文法: 言語を社会知として見たとき何が言えるか. 言語処理学会 第16回年次大会 発表論文集 (pp. 158-161).

連絡先 吉川 正人 machayoshikawa@dream.com